

教材とする創作童話の価値：
阿川弘之「きかん車やえもん」から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23696

教材とする創作童話の価値

——阿川弘之作「きかん車やえもん」から——

深 美 和 夫

「きかん車やえもん」の作品分析

1 作品

「まだ裏の川が、りょんりょんと流れていた昔、昔な。川のおちに、一本の太いやなぎの木が茂っていたんじや。半月がの、きまつて、やなぎの枝にかかるころな。カッパの三平が、によつこらと……」

わたしが、小学校一年のころまで、この話を床の中で祖母からよく聞いた。寒い夜、半月をながめて歩く時、ふつとその話を思い出して、三平の心のやさしさに胸をうずかせたものである。

なぜ、このようなことを思い出すのだろうか。それは童話という世界にある、とてつもなく美しい生命のはたらきがあるからだ。小学校国語教科書にも、文学教材としての創作童話が多く記されている。そこで、教科書（光村・二年下）・「きかん車やえもん」の作品分析をもとに、授業の実際を通じた児童のイメージ（作品の読み深めから生まれた見方・考え方）と、創作童話の価値について考察してみる。創作童話の価値については、いろいろ論もあろうが、童話の時代的流れ、読み味わう内容、創作する立場といった面についてもふれていきたい。

あるいなかの町の小さなきかんこに、やえもんという名のきかん車がありました。やえもんは、長い長い間はたらいたので、たいへん年をとって、くたびれていました。

「おれだつてシャー、わかいころにはシャー、すごいスピードではしつたものだがシャー。」

と、やえもんはいびつてみせますが、だれもあい手にしてくれません。だから、このころは、

「ブッスン、ブッスン、ブッスン。」

とおこつてばかりいました。

やえもんは、きょうもきやく車を引いて、あせをかきかき、大きなえきにやってきました。そこには、いろいろなれつ車が、たくさんあつまっていました。

小さなディーゼルカーが

「ケロロンロンケロロン。」

と歌を歌いながら止まっています。電気きかん車が、おけしょうを
してもらっています。とつきゅうが、

「ラランランバーン。」

とさけんで、止まらずに行ってしまします。

やえもんは、きたない自分になつかしくなりました。やえもんが
お昼ごはんの石たんを食べていると、電気きかん車が、

「やあい、石たん食いのやえもんやあい。石たん食って、おいしい
か。びんぼう汽車のやえもんやあい。」

といって。わらいました。

それを見ていたディーゼルカーも、

「ケラケラケラ、ケラケラケラ。」

とわらいました。

「ブッスン、おいしいわい。ブッスン、ブッスン。」

やえもんは、まっ黒なけむりをもくもくはいて、おこりました。
しばらくして、またやえもんははしりだしました。いなかの町のき

かんこへ帰るのです。

「おれは、今までこんなに長い間はたらいてきたのに、みんなで、お
れをはかにする。シャッシャッしゃくだ、しゃくだ、しゃくだ。」

あんまりおこったので、やえもんの顔が、まっかになりました。

うしろで、きやく車が、

「そんなにおこるな、ケットン。わすれておしまい、ケットン。」

となだめているのも、聞こえません。

やえもんきかん車は、黒いけむりと赤い火のこをいっしょにはき
出して、はしりました。子どもたちは、やえもんに手をふりました。

やえもんは、いつもなら、

「ポーポー、こんにちば。」

と声をかけるのに、きょうはそれさえわすれてしまいました。

つんであったいねに、やえもんのはいた火のこがかかって、もえ
だしました。おひやくしょうさんたちは、びっくりして、家からと
び出してきました。そうして、

「やえもんをやっつけてしまえ。」

「やえもんをうごけないようにしてしまえ。」

と口々にいって、おいかけてきました。やえもんはおどろきました。

「わるかったシャー。しらないでとんでもないことをした。こまっ
たシャー、シャー、シャー。」

やえもんは、青くなって、小さな町のきかんこへにげこみました。
おひやくしょうさんたちは、おいかけてきて、

「おいぼれきかん車は、どこだ。」

「やえもんは、どこへ行った。」

「火のこをはくきかん車は、やめさせろ。」

とどなりました。

てつ道の人たちは、しかたなく、つぎの日からやえもんを休ませ
ることにしました。やえもんは、きかんこのすみにかくれて、ぼろ
ぼろなみだをこぼしました。てつ道の人たちは、やえもんをどうし
たらいいかとそうだんしました。そうして、やえもんをこわして、
くずてつにすることにきめました。やえもんは、

「いやだ、いやだ。おれはいやだ。」

といっただけ回りましたが、とうとう町につれてこられました。

ディーゼルカーや子どもたちは、それを見て、

「かわいそうだなあ。」

といいました。

「このきかん車をどうするのですか。」

と、ひとりの人がきました。

「こわしてしまふのです。もうやくに立たなくなったので、くずつにしてしまふのです。」

と、てつ道の人が答えました。

「それはむちゃだ。」

その人はいいました。

「わたしは、東京の交通はくぶつかんのもですが、これは、じつにめずらしい古いきかん車です。日本じゅうに、二台か三台しかありません。どうです、はくぶつかんにゆずつてもらえませんか。」

「なるほど、それはいい考えだ。」

と、てつ道の人はいいました。

「ポポー、ポポー。」

と、やえもんは声を上げました。

「ばんざあい。」

と、子どもたちもいいました。

きれいにぬりなおしてもらつて、びかびかになったやえもんは、みんなに見おくられて、はくぶつかんにやつてきました。

はくぶつかんには、大ぜいの人が、やえもんきかん車を見にやつてきました。子どもたちは、やえもんのかたにのったり、おなかにもぐったりしてあそびました。ときどき、小鳥もやつてきて、やえもんのえんとつの中で、かくれんぼをしました。(あがわひろゆき)

2 作品の見方・考え方

(1) 文体について

——あるいなかの町の小さなきかんこに、やえもんという名のきかん車がいきました。——と、語りかける調子で始め、——ときどき、小鳥もやつてきて、やえもんのえんとつの中で、かくれんぼをしま

した。——という終わりまでが、おだやかで静かな文体である。

これは、やえもんが働き疲れ、年老いた機関車というイメージをうきぼりさせたかったものであろう。また、やえもんが駅を出る時、「ブッスン……シャッシャッしゃくだ、しゃくだ……」とおこりながら走り出すところ、さらに後からついていく客車が、「そんなにおこるな、ケットン……」と、はやすところの擬音音が、いかにも真実味とユーモアが相補し、文章全体にリズムカルな響きをかもしだしている。

(2) やえもんの性格について

——やえもんは、長い長い間はたらいだので、たいへん年をとつて、くたびれていました。「おれだってシャァ、わかいころにはシャァ、すごいスピードではしつたものだがシャァ。」——と、客観的な表現を受けて、やえもん本人にいわせている。いはつてみせても、だあれも相手にせず、それだけに気げんの悪いやえもんの姿は、老人のそれと少しも変わらない。

ある時、やえもんは働きざかりの電気機関車にあざけられ、とうとういかりが爆発する。しいたげられたものの悲しみでもある。やがて、それが原因で田んぼが火事になり、ひやくしようたちに追われ、ぼろぼろと涙をこぼす哀れさ。ごくあたりまえの人間のなりゆきだけに、いっそう哀れさをそそる。

最後に、やえもんを尊敬をもつて安らかに休めてあげられる場所は博物館であつたとわかる。働きぬいた者へのいたわりや、人間への暖かな愛情がじゅうぶんに感じられる。くず鉄にされずにすんだやえもんの願いは、静止の安息として受けとれる。

(3) 読み深める対象について

。やえもんの世間に対する差別への怒りと、世間のやえもんに対

する同情を感じとらせ、元氣あるやえものの生き方を読みとらせる。

。リズムミカルな楽しい表現のことばを、場面や登場人物の行動を通して理解させる。

。作品にえがかれている世界を、自分の感動を通して、さらに新しい見方、考え方のできる創造的な読みができるようにさせる。

以上、作品の見方・考え方を三つの視点で記してきたが、その三つを総合して考察してみよう。

若い時は、さぞ元氣でさつそうと働いたことと思われるやえもんも、よる年なみと時代の進歩には勝てない。しかしブライドを持ち続け、自分を軽視する世間にいかりをもつて働き続けた。そして、くず鉄という破滅からは救われたが、果たして働き続けてきたもののやえもんの最後の願いは、子どもや小鳥の楽しみの場として満足しているのであろうか。終末の安息は、あまりにも生産的でなく、消極的ではないだろうか。児童に、日本中に二台か三台しかないめずらしいものだから博物館入りをするのだという意味を理解させるためには、もっと説明がいるのではなからうか。ここで働きぬいた者へのいたわりや、人間への暖かい愛情が感じられながらも、なお不満が残るのである。

しかし、創作童話としての生命は新しい人生の創造に迫ることである。自己を表現することが目的で、人生や自然について感動したことを自己を通して表現することである。その意味において、やえもんの生き方そのものについては、児童の反応を知ることによって作品の価値が明確になると考える。

授業の実際

1 全文読みからの第一次感想分析(下の数字は人数)

(1) おもしろいな

「おれだってシャー……」

「ブッスン……」

「そんなに……ケットン」

「むちゃだ」

(2) ふしぎだなあ

どうして子どもに何もいわないの

なぜ、やえもんが、おこるの

(3) 今どき、じょう気きかん車が走っているのがおかしいな

うれしいな

(4) はくぶつかんへ行けるんだもの

くやしいな

●なぜ、くずてつにされなければならないの

(5) 「やあい……びんぼう汽車のやえもんやあい」

かわいそうだなあ

やくにたつのになぜこわすの

やくにたつて毎日働いているのにな

●くずてつにされると走れないよ

「おれは、今まで……しゃくだ、しゃくだ」

小さい子にばかにされるなんて

以上の(1)～(5)の観点に分析していった。そして、●くずてつにされなければならなかったということをめぐって、やえもんの生き方を追究するめやすを、「まだ働きたいのではないだろうか」という課題としてうみだしたのである。

2 課題をもとにした場面ごとの児童の反応

(1) なぜだれも相手にしないのだろうか

児童の反応（以下この項同じ）

「おれだってシャー……にもわかりませんが、きつと思ひ出しているんですよ。それは年をとって、もう役立つことができないっていう悲しい気持ちなんだと思います。」

「だれも相手にしないっていうのは、かわいそうだね。でも、しかたがないのだな。」

「長い長い間、働いたんだものな。」

(2) どうしてけむりをはいておこるのだろうか

(3) やえもんは、なぜへんじをしないのかな

「あんなにはやされては、たまらないのはあたりまえだ。」

「自分のすがたのきたないのに悲しみをかんだんだ。」

「しゃくだ、しゃくだというのは、ほんとにはらがたっているのだ。ぼくも、はらをたてるが、もっともつとくやしいのではないか。」

(4) やえもんはくずてつにされなかったが、ほんとにしあわせなんだろうか

「やえもんは、やっぱり働きたいのではないかな。」

「やえもんは、これでよかったんだ。ひなたぼっこで、むかしばなしをするのが、これからも働くということになるのだ。」

「やえもんは、手紙をかい返事をもらおうよ。」

以上のように(1)～(4)の場面ごとの内容を読み深めていくと、児童がそれぞれ反応を示したのである。教科書では、ものたりないので、原典である絵本（岩波子どもの本）の読み聞かせを並用しながら行なった。

3 やえもんに出した児童の手紙と作者（阿川弘之氏）からの返事

児童の手紙

A 「やえもんさん、お元気ですか。わたしたちは、やえもんさんの話を読みました。はくぶつかんへ行つてたのしかったですが。どういうことをみんなで話し合ったかというところ、長いこととはたいたのに、ばかにされるってどうしてかということ。やえもんさん、いまもおこっていますか。おこらないでくださいね。」

B 「やえもんさんは、電氣きかん車にばかにされて、くやしかったでしょうね。はくぶつかんに行つても、まだ、はたらきたいのですか。おこつた時に、やえもんさんは、火のこをはいておられたので、いやなかんじがしたの。いまは、やえもんさんは、はくぶつかんでいろいろな人と友だちになりましたか。わたしは、やえもんさんのはたらいたことがわかったの。もっともつとはたらいほしいです。金沢にも来てね。」

C 「やえもんさん。きみは、いばつたんだつて。あまりいばらないでいたらよかったよ。きみは、とつきゅうのはやさが目にかんだんだね。そんなこと気にしないで自分の力ではしれよかったんだよ。でも、はくぶつかんへ行つてうれいと思います。なぜかって、くずてつにされずになったんだものね。子どもたちに、むかし話をしたり、おなかや、せ中に小鳥をのせてやるのと、むかしのおきやくさんをのせてはしつたのと、どっちがたのしみか、へんじをかいね。」

D 「いまも、はくぶつかんでおこっていますか。東京のはくぶつかんは広くていいでしょうね。はくぶつかんで子どもたちとあそんでいるのがいいと思います。くやしいことや、たのしいことがいっぱいあったね。また、がんばってね。」

作者（阿川弘之氏）からの返事

「やえもんきかん車へ、みなさんから、たくさん手紙をありがとう。やえもんは、とてもよろこんで、うれしいシャー、うれしいシャーと、いいました。だけど、やえもんは、年よりで、のろまで、なかなかへんじが書けませんでした。ごめんなさいね。」

4 考察

1〜3までを通して考えられることは、児童の心の中に、やえもんのいきどおり、行為の結末の理解ができたと思う。ただ児童の手紙にあるように、やえもんは博物館へ行って、みんなに懐しがられ遊び相手であつてよいという立場と、まだまだ年老いても働きたいのだという考え方の二つを、どう処理するかということである。しかし、あえて両者を区別した決定をしなかったのである。その理由は、児童ひとりひとりの見方がどのように変わるかという可能性を未来に期待したいからである。つまり今後の成長とともに、やえもんの生き方について多面的な見方、考え方のできる児童に育てたいからである。

作者（阿川氏）からの返事を読んだ児童たちは、「うれしいシャー、うれしいシャー」に感動を示した。ただ返事の内容には、児童の手紙の答えに不足したものであったことは事実である。それで教室での話し合いで、「やえもんは、たくさんの人、子ども、小鳥たちと仲間になつてることが幸せなんだ。そして、そのことが働いていることで、みんなに役立っているんだ。」と生き方を追究した。

以上のことで考えると、教材としての創作童話の価値は、童話の世界の底を流れる人間の生き方を示していると考えたい。

創作童話の価値

1 童話の時代的流れ

童話ということばは、いつごろから使われ、どんな経路をたどってきたのだろうか。概略を記してみよう。

童話文学は、遠い昔からの神話、伝説、民話などの伝承文学といえよう。日本では、神話、伝説、中国の伝説を原典として、室町時代の「お伽草子」、江戸時代の「草双紙」に、説話として生まれているが、「童話」ということばは、まだ出てこない。江戸時代には「童話」と書物に字として出ているが、「わらべものがたり」「むかしばなし」とよばれていた。ところが、十九世紀（明治）になつてから、昔からある話でも、そこに作者の新しい解釈が加えられたものとしての「童話」、また話の材料を作者自身が新しいものとして創作した「創作童話」が生まれ、現在の童話となっている。

外国でも十九世紀の初め、メルヘン（童話）とよばれた。有名なグリム、アンデルセンなどが創作童話を生み現在に至っている。

日本の児童文学の童話は、どのように生まれたのだろうか。その初めをきいたのは、巖谷小波である。一八九一年「こがね丸」という童話を発表し、創作童話のさきがけとなつたのである。読み童話、話し童話を多く発表した。この話し童話（口演童話）を大正以来、さらに進めたのは久留島武彦がいる。「継続は力なり」と、子どもの心に光を与えた口演童話の達人といえよう。

つぎに巖谷小波の開拓した創作童話を芸術として広めたのが、小川未明である。一九一〇年「赤い船」を最初の童話集として発表し今日の日本童話界の核をきずいた。さらに鈴木三重吉が、一九一八年「赤い鳥」を創刊し、三重吉のなくなる一九三六年まで出版され

た。その間、「赤い鳥」に数多くのすぐれた童話作家が現われ、作品も発表された。林芙美子の「蛙」、坪田譲治の「風の中の子供」などもその一つである。

こうして、だれもが知っている一流作家が昭和にはいつて教多く出た。「ひろすけ童話」の名で知られる清純な童話作家に浜田広介、東北の少年たちをえがいた宮沢賢治の「風の又三郎」などがある。そして第二次世界大戦後は、石井桃子の「ノンちゃん雲に乗る」、与田準一の「五十一番目のザボン」、壺井栄の「柿の木のある家」などであり、現在では、いわゆる民話をもとにした再話としての創作童話、生活を語る創作童話、歴史上の人物を究明するもの、外国作家の作品を訳したものというように、現代社会に生きぬこうとする児童に夢を与えている。

2 読み味わう内容

童話を読むことに、どんな価値があるのだろうか。児童をとりまく世界に、絵本、幼年少年童話、物語、小説、多種多様の出版物がある。これら全部を童話と考へてもよいくらいである。なぜなら、一つの絵、一ページの文字から読み手がいろいろのことを想像できるからである。

想像できるということは、作品の中に出てくる登場人物と話ができるともいえる。「楽しいな。くやしくて。ふしぎだぞ。はやくしなないと間にあわないぞ。やっと安心した。」といった感動がわいてくるというときは、登場人物に「ああしてほしい。こうしたい。」という自分の願いが託されているにちがいない。また、作品の中に読み手の想像と同じことが表現されていると、自分の考え方と同じだと満足する。逆に読み手の予想と全くちがったとてつもない世界が表現されていると、そのふしぎさにひきこまれていって、新しい

ものの見方、考え方をする。こうしたことが作品に同化したり、登場人物と話がでけるということである。そして知ったこと、考えたことが、読み手にどのように生活していけばよいかと暗示するのである。そのことの行為が、読み味わう内容であろう。

「きかん車やえもん」の授業分析で出たことの「やえもんのひたむきな生き方に同情し、終末の安息に安心感と疑問の相補する感情」が、人間として生きる姿を考えさせてくれるのである。

「こんぎつね」（新美南吉作）は、児童たちによく知られている。主人公ごんのひとりぼっち——いたずら——反省——罪のつぐない——兵十との通じあい——死、といった筋であるが、読んでいくにつれて憤いをしようとする善意が、ちぐはぐになって、とりかえしのつかない死ということになっていく。この段階で読み手自身の心の中に考えさせられることがら、話したいことがら、ぐぐつとわいてくる。それが人間の生き方に暗示を与えている。

2 創作する立場（作家の立場ではない）

童話を創作する時にたいせつなことは、どんなことだろうか。一般的にいわれることは、その作品の主題、筋の構成、ことばの表現技術などがあげられよう。

よく児童から「童話に出てくる草や木、動物などが人間のような生活をしています、ほんとうに話すことができるのでしょうか。」と聞かれる。児童は、草や木が話しかけていても、読んでいる時は不思議に思わないのであるが、児童自身が創作しようとした時に、この疑問が出てくるのである。しかし、この疑問は、すぐ解きされるのである。つまり擬人化されているということである。動植物を人間のように書いてあるのは、童話のおもちゃの部分である。そう書くのがおもしろくて、わかりやすいわけである。つまり動植物の

話として読むけれども、すべて人間の姿を話していることだと気づく。この気づく力がたいせつであり、作品の主題や、筋の構成、ことばの表現にいかされるわけである。

ガース・ウィリアムの「しろいうさぎとくろいうさぎ」という童話（絵本）がある、白と黒の二ひきのうさぎが、「ほんとにそうおもう？」「ほんとにそうおもう」という願いのことばがある。作者はきつと、ある日突然に、その意味がすばらしく美しい世界として登場人物、読み手の生活に生きる力として役立つと考えていよう。

こうした動植物を主人公にした創作童話は、人間を書くことと変わらないことである。しかし、動植物を主人公にしても、人間を安易におきかえてよいものではない。一匹のうさぎ、一本のすみれにしても、それぞれの生態、成長について調査したうえで創作せねばならない。生きものの姿を分析してこそ創作の視点がわからう。

いま一つは、動植物を主人公としない人間そのものをえがくことである。童話のおもちゃというものではなく、ほんとうの生活事実、人生のありのままの姿で書いていくことである。

壺井栄の「坂道」にみられるように、主人公堂本さんの生き方が、働く人の正しさとしてわかる。つまり現実にある人間や、もののがたに形をいきいきとうつす。子どもの生きていく姿、その子どもをとりまくおとなや、家庭、社会なりの葛藤をリアルにえがき出し、読み手に自分たちはどう生きなければならないかを現実的に考えさせ感じとらせるものである。

創作の立場を以上の二つに分けて考えてみたが、ことばをかえれば、動植物を主人公にした童話は、メルヘン（空想童話）といえよう。人間そのものを主人公にした童話を、リアリズム（生活童話）といえよう。いずれにしても、この両者に共通することは、より深

い人生の真実をうかびださせるようにしていることである。

以上、「きかん車やえもん」の授業内容をもとにして、創作童話について考えを記してきた。

現代社会の童話のとらえ方からなると、おとなが子どもに、「こうあってほしい」という無限の可能性を願っていると思う。その願いが、教材として、童話集として出版されているのである。

ただ考えておきたいことは、童話の発想があまりにも広い次元でとられているということである。神話・伝説の流れをふんだもの、外国の日記文学の流れをふんだもの、また、そのどちらにもはいらないというものもある。それだけに創作童話という文学が、現実の生活にくいこんでいるといえる。

創作童話の価値については、じゅうぶんに記されなかったのは、わたし自身、作品を読んではないということである。長編、短編と公刊されている読み物には、ずいぶん豊かな発想の作品があらう。また短く抄訳したり、再話したりした作品の中に、ほのぼのとした人間の愛を感じるものがある。そういった作品を、子どもの立場で読み味わっていくことが、創作童話の価値をみいだしていくことだと考える。

（金沢大学教育学部付属小学校教諭）